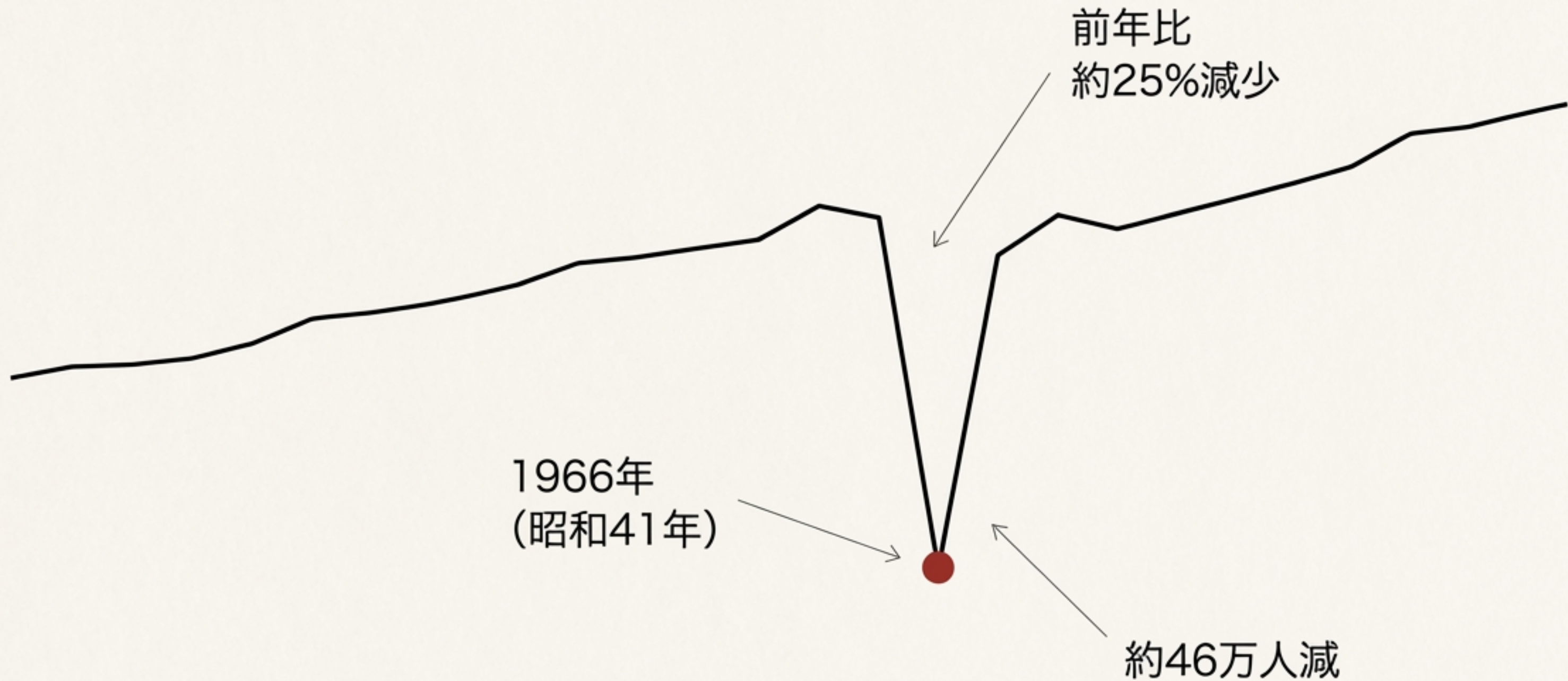


迷信から「迷心」の時代へ

1966年、日本の出生数に何が起こったのか？



運命を恐れた時代： 丙午（ひのえうま）の迷信

「丙午生まれの女性は気が強く夫の命を縮める」
という迷信が社会現象に。

起源は江戸時代の「八百屋お七放火事件」。
1666年の丙午生まれとされたお七と、「丙午
の年は火事が多い」という迷信が結びついた。



恐れるものの正体は、外から内へと変わった

迷信

運命を恐れる心



迷心

未来を信じきれない心

構造的少子化が生んだ「毎年が丙午」の時代

深刻な少子化が進み、特定の迷信がなくとも、日本全体としては「毎年が丙午」であるかのような様相を呈している。

予測：令和7年の出生数は65万人まで減少

危惧：令和8年（2026年）は、迷信によるさらなる落ち込みの可能性

AIは現代をどう見るか？



令和8年の出生数が丙午の迷信に影響されるのか？

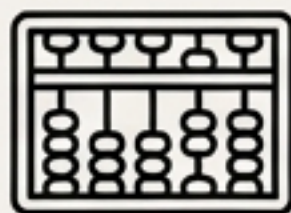


「令和8年の出生数が丙午の影響で大きく減ることはないでしょう。ただし、構造的少子化の延長線上で過去最低を更新する可能性は高い。もはや“丙午”という特定の迷信ではなく、“令和という時代そのもの”が、子を持つ勇気を試されているとも言えるでしょう」

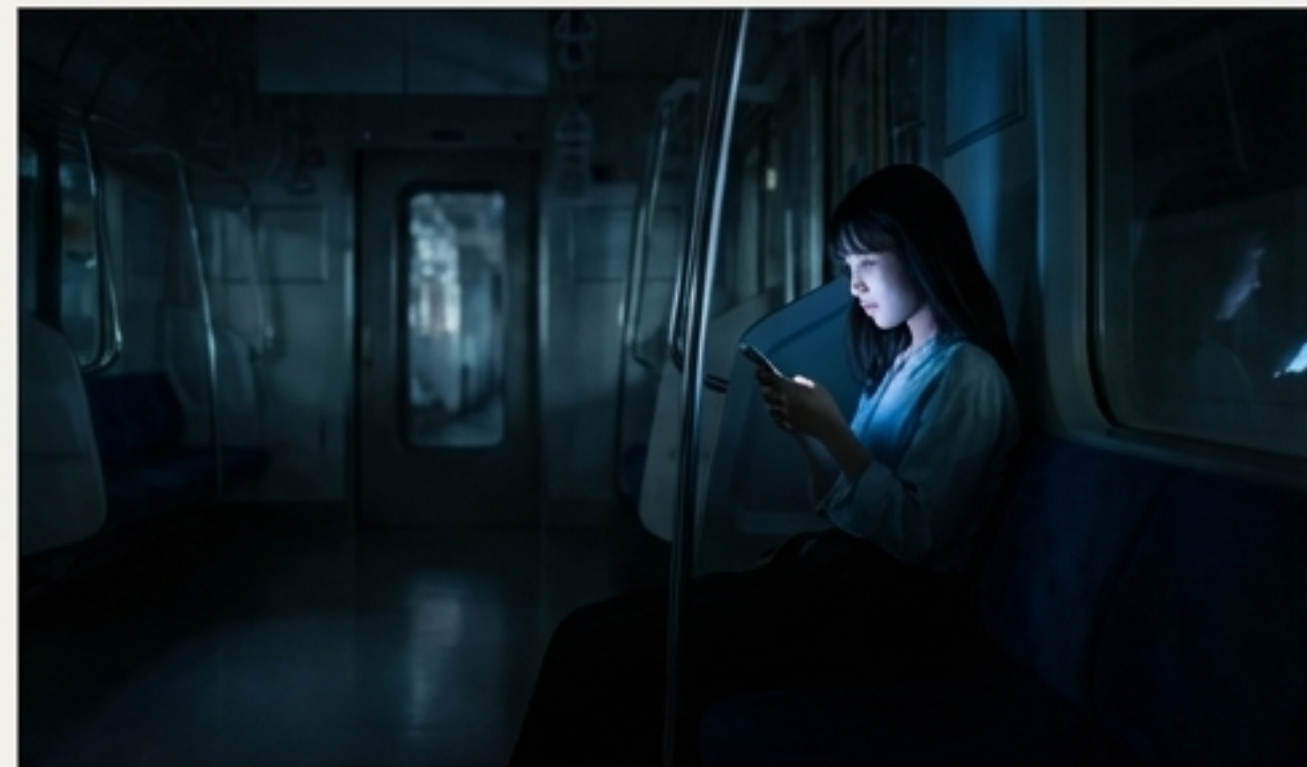
希望の余白があった昭和、不安が漂う令和



昭和



貧しくとも平等、将来への夢・希望



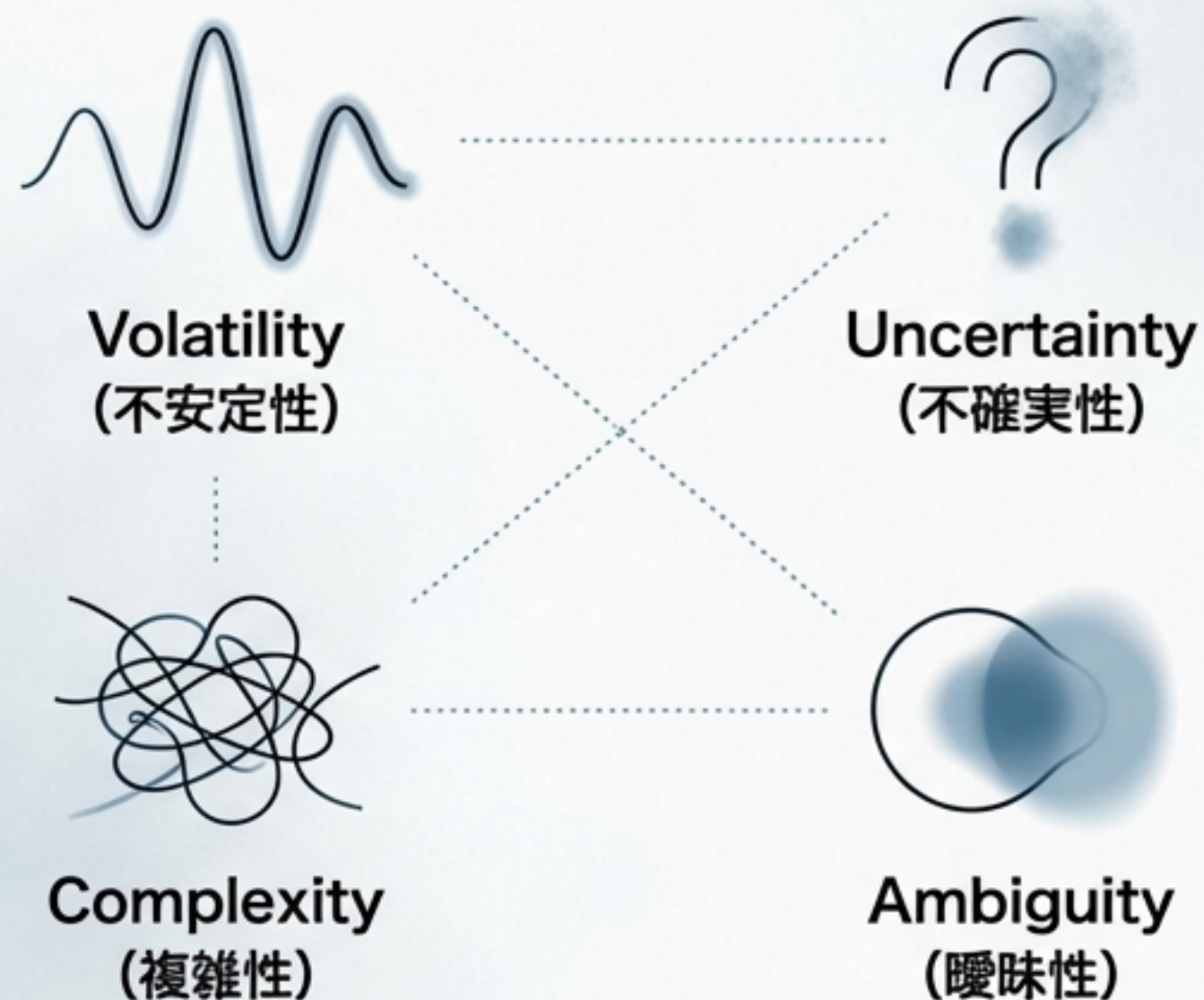
令和



便利になった反面、格差、将来への不安

私たちが生きる「VUCAの時代」とは

従来の安定した未来像や正解が通用しない世界



この霧の中で、私たちはどう進むべきか？

すべてをAIの「ご神託」通りに進めるわけにはいかない。
AIが示すのは統計学的なパターン。世界の本当の意味を見いだすのは、人間だ。





最初の光：自らを灯す「自灯明」

釈迦が説いた、他者に依存するのではなく、
自分自身を信じ、拠り所とすること。

VUCAの時代において、自らを照らす内なる
灯を育てることが不可欠となる。



もう一つの光：

もう一つの光：真理を灯す「法灯明」

仏の教えや真理を、暗闇を照らす灯火とすること。

もしAIが、迷信や偏見を排した正しい判断 を人間に示し、「迷心」を晴らす客観的な道筋となるならば、現代における法灯 明と成り得るのかもしれない。

霧を晴らす、二つの灯火

内なる光
自灯明

客観的な道筋
法灯明

この二つを手にする事で、私たちは未来を信じる心を取り戻す。

